

# 国語教育が育てる国際人と外国語教育の役割

大 野 厚 子

英語教育に携わるようになって久しく、外国語教育を大切に思う気持ちは今も昔も変わらない。しかし、最近の日本における英語の氾濫状況を見ると、英語教師としても複雑な気持ちにならざるを得ない。英語教師という立場を離れて、日本語を母国語とする日本人として考えてみると、今の日本の状況は異常ではないかと思う。街の看板には英語の文字が多く、デパートでも、電車に乗っても英語のアナウンスが聞こえる。また、日本製の電気製品にもかかわらず、全部英語で表示してあるものが増え、英語が分からなければ電気器具も使えない。そして、英語の方がカッコよく聞こえるのか、やたらカタカナ英語が使われる。高齢者のための制度に、「ショートステイ」「デイケア」などの名前をつけ、テレビや番組の題は「クローズアップ現代」などの日本人が意味がよく分からないカタカナ英語が頻繁に使われる。テレビでは、英語の副音声による二ヶ国語放送が、衛星放送を始め、どの放送局でも盛りだくさんである。もはや、英語は常識だという状況が作られてきている。

もう慣れ切っている日本のこれらの現象は異常に感じられないかもしれないが、これをアメリカに置き換えてみれば異常さがよく分かる。もしアメリカの街のいたるところに日本語で書いた看板があり、デパートやスーパーで買い物をして、電車やバスに乗っても日本語のアナウンスが聞こえたらどうであろう。そして、車や電気製品はアメリカ製にもかかわらず全部日本語で表示してあり、アメリカのCMにはやたらと日本人が登場する。テレビやラジオでは毎日、日本語会話の番組があり、街中には「日本語会話」の学校が溢れている。これではまるでアメリカは日本の植民地である。

先進国の中でもこんなに英語を圧倒的に重要視している国は日本だけである。小学校3年生から英語を教えるほどの力の入れようであり、英語を母国語とするAET(英語補助教員)が各学校に割り当てられるまでになった。今や英語は、教育の中でもっとも大切な科目の一つとなった。「これからの国際社会では英語が使えないと仕事にならない」「英語が使えないと国際社会で村八分にされてしまう」という悲観的な予測の下に、日本語の将来を悲観して、子供をわざわざ国際学校に入れる親もいるくらいである。漢字が書けない変な日本人が育っても、英語さえできれば良いというような人も出てくるほど日本での英語の存在が大きくなってきた。いっそ日本語をやめてすべて英語にした方が便利ではないかとさえいう人もいるのである。日本人の多くが「英語ができなければ人並みではない」という強迫観念すら感じているように思え

てくる。

なぜ日本はここまで英語を重要視するのだろうか。そこには日本人が抱いている英語に対する虚像があるのではないかと思うのである。本稿では最初に、英語に対する日本人の誤解を述べた後、日本が目指したアメリカの現状を説明し、次に、なぜ英語重視が危険であるか、また、なぜ国語教育が重要であるか、そして、最後に、日本における今後の外国語教育の役割について論じたい。そしてこれらのことを通して、今後の日本の行くべき方向を示唆してみようと思う。

## I. 英語に対する日本人の誤解

戦後、方向性を失った日本は、経済好調のアメリカを真似ようと、アメリカを日本の目指す方向と定めた。日本のアメリカ化がすさまじい勢いで進行する。アメリカ的な経済、教育、更には、アメリカ的な生き方を目指してきた。必然的に英語の地位は高くなった。しかし、日本人がアメリカを目指したために、英語に対する間違ったイメージが確立されてしまい、多くの誤解が生まれ、その結果、日本で英語が重要視されるようになった。

まず第一の誤解は、「英語が上手になれば国際人になれる」ということがある。英語は国際人になるための必要不可欠な言語であると信じた。しかし、英語ができれば国際人になれるというのであれば、英語を話す英米人も英語を公用語にしている国々の人たちも皆国際人ということになる。今では日本でも英語のレベルも上がっており、若者の中には外国人と平気で話す人たちも少なくないが、それではこの若者たちを国際人と呼べるのであろうか。実際には、流暢にしゃべることができても、内容のないことを得意の英語でしゃべり、英語ができるためにかえって軽薄さを外国人に暴露してしまう人もいようであろう。昔は、日本人は外国人に「神秘的」だと思われて一目置かれていたが、今では底が浅いというふうに思われることも多いかもしれない。

それでは、「国際人」とはどのような人のことをいうのであろうか。いろいろな定義があるだろうが、少なくとも「世界の人々に敬意を払われる人」であり、「英語圏だけでなく非英語圏のどんな人種の人たちとも偏見なく対等な立場で協調する態度を身につけた人」でなくてはいけないと思う。世界で英語を母国語に持っている人々や、公用語として使っている国の人々の中でも、このような資質を持っている人はほんのわずかであろう。日本を見ても、今の多くの日本人の意識の中の「国際社会」とは欧米社会のことであり、「国際人」とは西洋的に考え、西洋的に振舞う人であり、英語のできる人であるというイメージが強い。それでは欧米人はみんな、国際人かというところではない。大切なのは英語という伝達手段ではなく伝達内容なのであり、その人が、いかにどの国の人々にも尊敬される普遍的価値観を持っているかである。片言の英語しかできなくても尊敬されている人はいくらでもいる。英語の上達自体が内容を向上させないのは明らかであり、英語ができる人＝国際人ではないのである。

次に、「英語は経済発展のために不可欠」という誤解があげられる。アメリカの経済を目指

した日本は、英語ができるようになることは経済を発展させるために必要不可欠な能力であると信じた。世界からエコノミックアニマルと冷笑されるまでに経済第一主義になっていった日本は、経済復興のためには社会も文化も教育まで変えるというところまでできてしまった。つまり、経済発展に直接に役立つことだけが重要視されようとしているのである。その結果、アメリカのやり方を真似て、小学校から英語、パソコン、起業家精神、株式取引などを学ばせるべきという提言さえ出てくるまでになった。

しかし、本当に英語が経済発展にそれほどの影響があるのだろうか。それでは、戦後の日本の驚異的ともいえる経済発展は、その関わった人たちが英語ができたからだろうか。そうではない。世界でもっとも英語の下手な日本人がこの最大の経済成長を成し遂げたのである。日本人の労働力の質の高さ、つまり勤勉さ、忍耐力、奉仕精神、国の発展を想う祖国愛、などの資質があったからこそこれだけの大事業ができたのだと思うのである。英語がたとえできていたとしても、労働力の質の高さがなかったならば決して発展することはできなかったと確信する。実際に、世界には英語を公用語としながら経済不振を長い間続けている国はいくらでもある。英語が経済を発展させるのではないことがこの事実から見ても明らかである。

もう一つの誤解は「日本語より英語の方が優れている」というものである。戦後、すべてをアメリカの物差しで測るような傾向になり、多くの日本人は、「日本はアメリカより劣っている国」というような錯覚に陥った。その結果、自分の国である日本に対して、また自分が日本人であることに對しても誇りを持ってなくなってしまった。教育においても、日本人として誇りを持たせるような教育が一掃され、アメリカ志向が助長されるような教育がなされてきた。日本文化に劣等感さえ持つ日本人が増え、マスメディアも「アメリカではすでにこうだが、日本はまだ遅れている」といった類の情報が溢れている。意識の上では、日本人全体が急速にアメリカ化されてきたといってもいい。そして、意識的にも、無意識的にも、「英語の方が日本語よりすばらしい」「英語を話せる人はすばらしい人」というような錯覚に陥ってしまった。英語はあこがれであり、理想である。英語に比べれば日本語など非論理的で、曖昧で、かっこ悪く、古臭い。日本語を捨てられないのならばせめてカタカナ英語でも大量に取り入れていかなければいけないと、いたるところで使い、日本語を使わないようにする。日本人の中には、わざと誰も分からないような英語を入れて日本語を話したりする人もいるくらいである。また、若者の中には、「なぜ、自分はアメリカ人に生まれなかったんだろう。アメリカ人に生まれていれば、英語がベラベラなのに。なぜ日本人に生まれてきたんだろう」という子もいるほどである。昔は「言霊の幸う国」と讃えられた日本の伝統が確実に失われつつある。日本語がいかかに優れている言語であるか日本人自身が知らない。実際は、日本語の語彙数は世界の言語の中で秀でて多く、日本語で表すことができない分野は一つとしてないという。インドネシアやタイの留学生が日本語で最先端の科学を表現できることをうらやましがる。彼らの国の母国語にはその語彙がないのである。それほど優れている国語に日本人は誇りを持ってなくなってしまったのである。

また、「日本国民すべてに英語が必要である」という誤解がある。現実には、英語教師や研究者やビジネスマンなどのごく一部の職業以外には日本での日常生活には英語は全く不必要なのである。80パーセント以上の日本人は「海外旅行にちょっと話せた方がいい」「外国人に道を聞かれた時などに使えたらいい」「テレビや映画を見る時に便利」と思っている程度であり、ほとんどの人が一生のうちで英語を話す機会は数えるほどであるか、全くないという世論調査の結果がある。かつて英語圏の国に植民地化されたインドやシンガポールなどの国とは違い、日本は全国どこに行こうと、英語を全く知らなくても日本語だけで暮らしていくことができる、恵まれた国なのである。ほとんどの国民が英語など勉強していなくても全然不思議ではない国なのだ。にもかかわらず、多くの日本人がこの一生の中の数少ない英語を使う機会のために英語習得に膨大な時間と労力をかけているのである。

## II. 日本が目指してきたアメリカの実状

このような誤解は、「アメリカを見習わなければならない」という戦後の方向性があったために生じたといえる。アメリカ人のかっこ良さや自由な考え方や生活の豊かさにあこがれて日本人は英語を勉強してきた。政治的にも経済的にもアメリカとの関わりが多くなるにつれ、多くの人々がアメリカに留学するようになり、アメリカ英語が主流になってきた。私自身、アメリカに留学し、そこでの生活を体験した者であるが、本当にアメリカは日本が見習うべき国なのであろうかと疑問に思う。確かに、アメリカという国はいろいろな意味で外国人にとっては魅力的な国ではある。実力主義の国であり、能力や実力のある人にとってはこんなに良い国はない。外国から来て何も無いところから始めても、成功ができる多くのチャンスを与えてくれる国である。能力がどの国よりも公平に評価されるのである。日本人が持つアメリカ人のイメージは、この自由で、明るく、豊かな、そして強い国なのである。

しかしこのような実力主義や競争社会の裏でどれほどの人たちが苦しんでいるかはあまり知らない日本人が多い。実際には、能力のない者、また、能力や実力が発揮できなくなったり、なくなってしまった者にとっては大変厳しい国である。どれほど会社のために貢献した人でも、実力がなくなれば次の日にも捨てられる残酷さも持っている国でもある。解雇された人が家族と共に路頭に迷わなければならないとしても合理的に切り捨てる。また雇われている側も、もっと条件の良い会社があれば、会社が困ろうと辞める。その結果がどうなっても自分や会社の利益が優先される。私が一番アメリカで驚いたことは、老人が大切にされていないということである。昔は国のために貢献した人たちでも、役に立たなくなると社会の厄介者扱いのようになってしまう。日本の文化に根づいている「恩」という価値観というものがないのに驚いたものである。

また、国富の半分を、人口のたった1パーセントの人たちが所有しているという弱肉強食の国であるということにも多くの日本人は疎い。この富の裏で多くの人々が貧困にあえいでいるのである。そして、こういう合理主義、論理主義、実力主義の裏に、日本の20倍を超える弁護

士がいるという恐るべき訴訟社会であることも日本人は実感できない。自分の方に全責任がある問題であっても、利害が絡むことには絶対謝らない。謝れば全責任を負わなければならないからである。示談などはほとんどなく、弁護士に弁護させるのである。人間関係が壊れても利害を優先させるのである。そして、このような人の不幸を餌にして、お金をむさぼり取る弁護士がたくさんいる。離婚率も大変高く、青少年の凶悪犯罪が大変多い。果てしないリストラがあり、日本の数十倍も精神カウンセラーが存在し、多くの人々が精神的に苦しみカウンセラーにかかっているという事実もあまり情報として入ってこない。アメリカがいかに病んでいる国かということはあまり伝わってこないのである。とにかく、日本人にとってアメリカはあこがれの国なのであり、こういうアメリカの裏の部分はどうしてもよいことなのかもしれない。

### Ⅲ. 英語重要視が持つ危険性

こうして、アメリカの華やかな部分だけを目指し、戦後、日本はアメリカ的なやり方を取り入れてきた。リストラ、実力主義、市場経済、規制緩和、小さな政府、ゆとり教育、子供中心主義などは、全部、アメリカのものである。今の日本の現状を見ると、日本もアメリカがたどった道を着実にたどっているのがよく分かる。今、日本は、経済的にも、教育的にも危機的状況にある。容赦ないリストラが行われ、失業者が増え続け、多くの人々が経済的不安の中で生きている。日本の将来を担っていかなければならない若者たちの多くが、フリーターと称して定職を持たず、勝手気ままに生きている。世界一を誇った治安も悪化の一途をたどり、少年犯罪も増えてきた。「ゆとり教育」「国際人を育てる」「自主性や創造性を育てる」「人権教育」「個を育てる」などの教育改革が唱和され試みられてきたが、結果はどれも芳しくなく、年々子供たちの状態が悪化してきている。学力も着実に低下し続け、いじめ、不登校、学校崩壊なども一向に減る兆しがないのである。日本が日本国として存続できるかどうかの危機的な状況にあるといっても過言ではない。

実は、この英語教育を重要視するようになった背景こそが、日本の危機的状況に大きく影響していることを、日本人はもっと真剣に捉えなければならない時期にきていると思う。日本はアメリカではないということを忘れてはいけない。日本のような長い歴史を持っている国が、アメリカのような特殊な形で建国された国のやり方を真似れば、長い間受け継がれて、育まれてきた伝統、文化、情緒、美風などの、国の魂というべきものを深く傷つけてしまい、何よりも次の世代を担う子供たちを育てる日本文化という肥えた土壌を取り上げてしまうことになる。日本が長く持ってきた価値観が、ある特定の国の価値観に染まることは大変危険なことである。

英語は確かに便利な言語だが、英語による便利さや豊かさを全国民がひたすらに追い求めようとするなら、その陰で確実に失われているものもあるということを忘れてはいけない。なぜならば、言語と文化は表裏一体のものであり、英語教育や英語学習は決して言葉だけに終わらないのである。英語を上手にしゃべることができるということは、その背後にある文化を身につけ、英語の発想で物事を考え行動するということであり、価値観も英語風になるということ

である。例えば、日本の文化に根づいている「謙譲の美德」という価値観は英語の発想にはない。こういう価値観や発想を変えないと英語がうまいとはいえないのである。英語が日本で主に使われることになれば、米英の価値観、思考法、思想が支配的になるのは必然的であり、長い間受け継がれてきた日本文化や価値観が知らないうちに確実に蝕まれ、失われる代償があるということを忘れてはいけない。

#### IV. 国語教育の重要性

私は、教育の中で何より優先されなければならない一番大事な科目は、英語ではなく、国語であると思う。英語の重要性を強調する前に、学校教育がまず目指さなければならないものは、日本人が何よりも日本語を思考の道具として使いこなすことである。なぜなら、国語は単なる情報伝達的手段ではなく、思考力、論理力、情緒という、すべての土台になるものを育てるからである。物事を考える時、頭の中は言語を用いて思考しているのである。人間は持っている語彙を大きく超えて考えたり感じたりすることはない。母国語の習得が思考の深さや情緒の発育を大きく左右し、母国語の語彙の範囲が思考の深さや知的活動や情緒に影響するという。東北大学の川島教授は「脳の読み書き計算をつかさどる部分は、人間の情緒をつかさどる部分と重なり合っている」と指摘している。つまり、読んだり書いたりする力は情緒の安定に影響するというのである。実際、兵庫県の小学校の教師である陰山英男氏が、この読み書き計算を生徒に徹底的にさせ、「揺るぎ無き基礎」をつけさせた結果、自ら学ぶようになっただけでなく、情緒が安定してきて、学校内のいじめ、暴力などの問題が全くなくなるという経験をしたという。いかに国語の力が思考力や情緒に影響するかが分かる。また、ある中学校の校長先生が、自分が国文学専攻だったということもあり、2年間全校をあげて国語に力を入れたという。その結果、何と、ほとんどの生徒のすべての教科の成績が上がっていたというのである。つまり、英語で深く考えられるかどうか、数学の問題を解ける力があるか、美などに対するいろいろな感性や情緒が育つかどうかさえも国語の力にかかってくるのである。

また、国語を通して、代々受け継がれてきた日本の精神構造や価値観が確立されていくのである。なぜなら、言語を学ぶということはその国の文化や価値観を学ぶということであり、母国語＝文化伝統＝民族としてのアイデンティティー（帰属意識）なのである。日本語が習得されなければ、日本の文化や価値観を身につけることはできず、日本人としてのアイデンティティーが確立できないことになる。母国語である日本語がまだ確立されていない小学校の生徒に英語を導入することは、母国語が身につく前に欧米的な文化が取り入れられることになり、知らず知らずのうちにその文化や価値観を身につけさせてしまうことになるだけでなく、思考や情緒の発育にも影響を与えることになる。

例えば、日本人は贈り物をする時によく「つまらないものですが」という。こういう価値観も文化もアメリカにはない。「なぜ、つまらないと思うものを人にあげるのか」と思うようである。この言葉に深く刻み込まれている日本独特の奥ゆかしさ、謙虚さはなかなか理解できな

い。英語に埋め込まれている文化が違うからである。その言葉の奥の意味に、「真心を込めた贈り物ですが、あなたが私にしてくださったことに対する恩に比べれば取るに足らない、つまらないものですが、どうか受け取ってください」という奥ゆかしい日本文化があるということの説明でもなかなか理解できない。「恩」「孝行」「お陰様で」「つまらないものですが」「よろしくお願いします」などの日本語の持っている日本独特の価値観は、小さい時に身につけることができないと、その価値観を持っていないアメリカ人にどんなにこれを説明しても分からないような変な日本人となってしまうのである。それは「人の物を盗んではいけない」という道徳観が小さいころに身につかなければ、あとでどんなに説明してもわからないのに似ているかもしれない。小さい頃に、「金持ちから物を盗むのは別に悪いことではない」という合理主義的な考えが身につけてしまえば、もう容易にその価値観を変えることはできない。大人になってからでは遅いのである。

また、私がアメリカに留学している時、アメリカ人に日本語を教えたことがある。ある時、アメリカ人に混じって一人の品のある日本人の婦人が生徒として入ってきた。日本語での会話に全く問題がなく、なぜ日本語を勉強するのか不思議だった。実は彼女は、小さい頃、父親の仕事の関係で世界の国々を転々とし、日本語の読み書きを小さい頃にきちんと身につける機会を失ったそうである。大人になった今、日本語も英語も流暢に話すことができるにもかかわらず、どちらの言語でも自分の感情や考えを十分に表すことができない不安定さを持っているという。それだけではなく、日本に住んでも、またどこの国にいても心地よく感じる国がない、根無し草のような精神状態であるというのである。このことを思い出し、子供の時の国語の習得が人間の情緒や思考や民族意識に与える影響がいかに大きいかを改めて痛感した。

小学校の国語教育がいかに大切かということである。しかし、現実はどうであろう。英語会話能力を育てるために、小学校に英語が導入され、日本語の時間数は大幅に削られた。小学校の日本語の総時間数は戦前の3分の1である。英語の時間数を増やすことが、国語の時間数を減らすことになっても一向に構わないのである。英語を身につけさせることが何よりも優先されるのである。「国語の時間数が減っても、英語以外の科目はすべて日本語で教えるので心配ない」というのが、これを推進する教育者の考えであると聞く。「ゆとり教育」の方針が確立され、「自ら考え、自ら学ぶ」「生きる力を育てる」という美しい理念が提唱されたが、「考え」「学ぶ」力の源の思考力、論理力、そして情緒を築いてくれる国語という基礎を身につけさせることをなおざりにして、どうして「自ら考え、自ら学ぶ」ことができるのだろうと疑問に思う。英語を重視することによって、思考力や情緒の土台になる国語教育が軽視される教育をこのまま続けていけば、ますます教育が荒廃するということは火を見るより明らかである。

小中学生の時期に漢字をきちんと身につけさせ国語の読書をさせるのである。読書によって思考力、論理力、そして情緒を身につけさせる。この時期に、美しい情緒を育むのにふさわしいものや感動的な物語などを読ませ、美的感性を養わせたり、勇気、誠実、慈愛、忍耐、礼節などを吸収させたりする。また、日本人として必須の情緒である「もののあわれ」も育ませる。

できるだけ、現代の若手作家の読み物ではなく、日本の先人が残してくれた至宝ともいえる文学遺産に接するようにさせることが大事である。子供に迎合して国語の教科書を平易で軽い作品ばかりにしてはいけない。これは、日本語の美しい表現やリズム、人々の深い情感、美しい自然への日本人の繊細な感性、などに触れる機会を子供から奪ってしまうことになるのである。

また、こういう国語教育を通して家族愛、郷土愛、祖国愛、人類愛も育てておかねばならない。自国の文化や伝統を心から愛することができるように育てることが、人類愛を育てることになるのである。自分の国を愛することができる人こそが、他国の人々が自国を愛す、その自分と同じ思いを理解できるのである。今、教師がこういうことを説教により教えることができなくなっている。これらは道徳であり、日本人としての行動基準であるから子供の時に徹底しなければならない。これらは、人間としての基本であるばかりか、国際人になるためにも不可欠なのである。どれ一つ欠けていても、国際社会で一人前と見なされない。この苦境を打破するために、日本人一人一人がこれらの情緒を身につけ、論理や合理のほかに大切なものがあるということの世界に発信し、教えていくことが求められると思う。これこそが日本人が今後の世界にしよう最大の貢献であると思う。日本人はこれらの情緒を身につけ、世界の人から尊敬されるような、本当の意味での国際人になることを目指す教育を確立していかなければならない。経済的繁栄をいくら達成したところで、嫉妬や羨望の対象となっても、尊敬されることはありえないのである。そのために、国語教育が大きな役割を果たしてくれると確信する。

## V. 外国語教育の役割

私は決して日本での英語教育などの外国語教育を否定しているのではない。私自身、長い間英語教育に携わってきた英語教師である。外国語を学ぶことで開かれる世界のすばらしさを身をもって体験してきた者である。むしろ、英語や外国語教育は奨励されるべきであり、いろいろな文化や価値観を理解する日本人が増えるべきであると思う。ただ、言語教育の中で一番重要視されなければならないのは日本語であり、どの外国語を学ぶにしても、その言語を学ぶことで、日本語や日本語に埋め込まれている文化が軽視されたり、崩されたりするような教え方や習得の仕方は避けなければならないと思うのである。

それでは、今の学校教育の枠組みの中で全員を対象とした外国語教育のあり方とはどのようなものであろうか。生徒の中には将来、世界で活躍するビジネスマンや外交官になる人もいれば、英語に無縁の仕事や環境の中で生活する生徒もいる。将来英語を駆使する者もいれば、全く使わない者もいる。英語の好きな生徒もいれば、苦手な生徒もいる。将来、英語をコミュニケーションの道具として使う者も、使わない者にも、すべて共通の意味のある外国語教育の中身とはどんなものなのであろうか。

それは、「異質なものに触れさせること」である。自分が当たり前だと思っているものが全く通用しないことを外国語ほど実感させてくれるものはない。音声、発想、価値観などすべてにおいて日本語と違うのである。同質性が高く、歴史的にも異質なものと共存した経験がほと



んどない日本人に、世の中には自分と全く異質なものが存在するのだということを痛感させるのは外国語である。日本は世界の国々の中でも異質であり、特殊な国である。例えば、日本以外の先進国はかなりの共通点を持っているが、日本は人種、言語、文化、宗教、価値観、地理的位置などかなり違う。逆にいうと、日本にとって、こうした外国の国々が極めて異質な国ということになる。同質なものしか知らない日本人が、世界の国々との関わりをますます強めていかなければならない時代を迎えた今、いかに相反するものや異質のものに溶け込み、取り込んでいけるかが、日本の命運を握っているといっても過言ではない。

相反する価値観などの異質なものに触れさせることは、国際理解のためにも、文化摩擦の解消のためにも、また、異質的な考え方に対する寛容な態度を育てるためにも役立つ。また同時にそれは思考の幅を広げることであり、自国の文化をより良いものにするための具体的な行動にもつながる。授業の中で、せめて5分でもこの「文化」に当てる。話題は教科書の語句や題材にいくらでもある。例えば、ある課に“brother”とか“sister”が出てきたり、“first name”での呼びかけが出てきた時、それを日本語の「お兄さん」「お姉さん」「…さん」という呼びかけと比べることができ、それをきっかけに日本社会での「謙遜志向」とアメリカでの「対等志向」の比較の話ができる。それが生まれた歴史的な背景と共に生徒たちに説明する。無意識的にしている言動の「発見」に当てるのである。するとただ生意気に見えたアメリカ人や、逆に卑屈に思えた日本人の中に、とても身近な存在としての同じ「人間」が見えてくるのである。また、外国語の時間が英語一辺倒になってしまわないように、他のいくつかの外国語も時折の雑談の中で紹介できるように教師は勉強し始めるべきである。異質な人間に心を開く態度を養うことが狙いなのである。そして、そういう相対性をふまえて、自分が受け継いできた日本文化を大事に守っていくことの大切さも気づかせる。

教師が気をつけなければならないことは、英語などの外国語の背景にある文化をしっかりと認識して、自分の中にある「傾きの精神構造」を取り除かなければならないということである。教師が外国人のAET（英語補教員）の前で、不安や劣等感を感じるとするならば、問題は教師の精神構造そのものにあることに気が付かなければならない。教師が傾きや偏りに歪んだ精神構造から開放されないで、どうして生徒に正しい世界観を与えることができるであろうか。ここが日本である以上、少なくとも他教科の先生は当然日本語でAETに話しかけるべきである。また、英語教師は二流のアメリカ人として生徒の前に立つべきではなく、日本に誇りを持った日本人として立ち、異文化を背負ったAETと対等な立場で楽しく積極的な異文化コミュニケーションをする姿を生徒に見せるべきである。生徒に国際理解の基礎を培わせたり、国際理解を深めさせたりするためには、とりもなおさず、まず私たち教師の中にある英語への傾きや偏りの意識をなくしていくことが大切なのである。世界の人々への対等な意識と広い視野を与えながら、異質なものにそのまま触れさせる外国語を通してこそ、私たち教師は次の世代の若者たちに実りある豊かな内容を与えることができるのである。それでこそ外国語教育という仕事を通して、真の国際人を育てるというすばらしい役割を果たすことができるのだと思う。さま

ざまな異文化から多くのことを学んだ上で、日本の風土や伝統に根ざし、かつ21世紀の人類社会の発展に寄与できる普遍性を世界に発信することが今後の日本人の役割であると確信する。

#### 参考文献

- 松本青也「異文化理解の役割」『英語教育』開隆堂，1987  
「異文化理解の必要性」『現代英語教育』研究社出版，1987  
「英語教師のコクサイ化」『現代英語教育』研究社出版，1991  
「これからの英語教育の課題」『英語教育』開隆堂，1991  
「言語と文化」『英語教育』開隆堂，1991  
「日米文化の特質—文化変形規則（CTR）をめぐって」研究社出版，1999
- 藤原正彦「祖国とは国語」講談社，2003
- 陰山英男「『読み，書き，計算』で学力再生」小学館，2003
- 三森ゆかり「外国語を身につけるための日本語レッスン」白水社，2003